長めの論証文作成に力点を置いた授業

―実践報告２―

青木滋之

１．はじめに

本論では、「論理的思考教育を基礎とするとパラグラフ・ライティングの段階的指導 －実践報告１－」に引き続き、もう１つの実践報告として、私（青木）のクラスではどのような授業を行ったのか、（２.）授業コンセプト、（３.）授業構成、（４.）使った教材、（５.）事後評価および反省点、という４つの点から報告を行いたい。次節で述べるが、2018 年度のアカデミックスキル１は、初回授業に配布される A4 一枚の最大公約数をクリアさえすれば、他のどのような点に力を入れるかは各教員の自由であった。私の授業では、「長めの論証文を、学術論文の体裁に従い、周りの学生との話し合いを踏まえて書くことができること」を実践することを目指した。特に、周りの学生との話し合いを軸に、グループワークを中軸に据えて授業を行うことは今回初めてであったので、冒険ではあったが、大きな失敗もなく、概ね成功したのではないかと考えている。

２．授業コンセプト

授業実践を仔細に紹介していく前に、青木クラスで重視した授業コンセプトを説明する。前掲論文「アカデミックスキル１の概要」の 1.4. に掲載されているように、2018 年度のアカデミックスキル１では、

アカデミックスキル１が目指す３つのゴール
１．しっかりと論証を行った文章を書く―論理的に考える
２．パラグラフ・ライティングに従った文章を書く―論理的に書く
３．剽窃を避け、適切な引用を行う―論理的に書く

という３点を、全クラス共通の最大公約数とした。大学の授業は基本的に、各教員の哲学や経験に基づいて進んでいくので、全クラスを画一的なものとする必要性はない。だが、「アカデミックスキル１」と銘打っている授業で、各クラスで教えられる内容がバラバラであっては困る。だから、「最低限、これだけは必ず学生にマスターさせましょう」という公約数を設定し、それを達成するための具体的な授業法、教材などは各教員の自由としたわけである。ただし、アカデミックスキル１の前身である「文章表現法」授業からの蓄積として、『論理的に考える』『論理的に読む』『論理的文章表現』という３つのオリジナルテキストがあり、それらは練習問題の解答と共に、全学生に配布された。これらテキストを使う教員も多かった。私も『論理的に考える』『論理的に読む』の作成に関わり、また長年『論理的文章表現』を用いてきたこともあり、これら３つのテキストを中心に用いた。

私の授業のコンセプトは、次の３つである。

①論証を、練習問題を通じてしっかり理解してもらうこと
②長めの文章を、パラグラフライティングに従って書けるようになること
③周りの学生との話し合いを踏まえて、文章をふくらましていくこと

順に説明していきたい。

①「論証」

アカデミックスキル１の目的は、学生にレポート作成に必要になる技法を身に付けてもらうことにある。その核にあたるのが、「論証」である。レポートや卒論は、学術論文の卵であるが、論文の肝は「理性的な人間であれば、誰でも受け入れられるだけの論証」を行うことに尽きる。論文における論証は、分野ごとで作法が異なり、スタンダードとなる方法論は異なるが、＜根拠から主張を導き出す＞という論証そのものの大原則は変わらない。この論証というルールに、様々な練習問題を通じて慣れ親しんでもらうことが、まずもって必要だと考えた。『論理的に考える』のテキストを使って、論証と論証でないものを見分ける問題や、様々な論証の型を見分ける問題、不備のある論証を改善する問題などを網羅的に扱った。

②「長めの文章」および「パラグラフライティング」

論証（内容）に加え、学術論文が持つ両輪のもう１つに、形式が挙げられる。論文には決まった形式があり、その中でも汎用的なものとして、「パラグラフライティング」が挙げられる。パラグラフの先頭にはトピックセンテンスを並べ、トピックセンテンスのみを読むだけで論文全体の論旨が読み取れるようにする、というものである。さらに私のクラスでは、「長めの文章」を書くことを強調した。一度長い文章を書いた経験があれば、今後の人生でどのような文章課題にぶつかっても、難儀することはないだろうと思ったからである。例えば、理工系学生科学技術論文コンクール（日刊工業新聞社）などを見ると、「3200 字以内」や他には「4500-5000 字」といった規定（NRI 学生小論文コンテスト）がある。こうしたコンクールに、会津大生でも出せるように訓練したいと思った。また、42 キロマラソンランナーは練習で 100-200 キロ走るだとか、コックは出す料理よりもはるかに難しい料理で腕を磨く、といった話からアナロジカルに考えてみても、優れた短めの論証文を書く上で、長めの論証文を書いた経験があることがプラスになると考えた。

③「周りの学生との話し合い」

長めの論証文を書く上で、学生にとってネックになるのが、どのようにしたら論証を拡張できるか、である。簡単に言うと、どのようにしたら（有意味な仕方で）字数が伸ばせるか、ということである。そこで大変助けになるのが、自分とは異なる価値観や考え方を持つ、他者である。とりわけ、同学年の周りの学生から論証の不備や、パラグラフライティングの欠点を指摘してもらうことは、多くのプラスがある。私の授業では、次のような複数の効果が得られたと思う。

・1 人の教員では添削しきれないが、ペアワークにより多くの学生のレポート添削が可能になる。
・周りの学生のレポートをチェックすることにより、自分のレポートの不備にも気付くことができる。
・レポートを改善するヒントを与えられることで、長い論証文を完成させることが可能になる。
・大学における、共同研究マインドを涵養する第一歩となる。
・普段話し合うことのない学生ともワークを行うことにより、コミュニケーション能力が養われる。

他方、学生同士によるチェックには限界もあるため、教員による個別指導的な添削も適宜必要である。とりわけ、上位・下位の学生に対するケアは必要であろう。2018 年度のアカデミックスキル１では、だいた

い毎授業で 2–3 人の学生から、「周りの学生から良いフィードバックを得られなかった」等の理由でメールでの課題提出を受け付け、赤ペンによる指導を行った。

３．授業構成

概ね、オリジナルテキストに沿って授業を進めていった。テキストは 3 つ（『論理的に考える』『論理的に読む』『論理的に書く*』）用い、基本的に

・宿題の確認
・新しい単元の解説
・次回までの宿題の通知

という授業構成をとった（*『論理的に書く』というのは、『論理的文章表現』を青木が要点をまとめたプリントである）。

日程	内容	宿題
1 回 4/9	授業イントロダクション 『論理的に考える』6-10 ページ	練習問題 1
2 回 4/12	『考える』 13-14 ページ	練習問題 2
3 回 4/16	『考える』 23-25 ページ	練習問題 4
4 回 4/19	『考える』 28-29 ページ	練習問題 5
5 回 4/23	『考える』 35-36 ページ	練習問題 7
6 回 4/26	『考える』 42 ページ	練習問題 10 「あなたは、この著者の論証に賛成か、それとも反対か。著者の論証を説明したのちに、あなた自身の考えを論じなさい。全体で 800 字以上とすること。」
7 回 5/7	『論理的に読む』7-9 ページ	練習問題 4
8 回 5/10	『論理的に書く』その 1	「あなたは、コンピュータを使って、どのように社会に貢献していきたいと考えるか。800 字程度で論述しなさい。」
9 回 5/14	『書く』その２	「1600 字程度で」
10 回 5/21	『書く』その３	「2400 字程度で」
11 回 5/24	『書く』その４	「3200 字程度で」
12 回 5/28	『書く』その５	「3200 字以上で」 ＋プレゼンテーション 1
13 回 5/31	プレゼンテーション２	最終レポートの相互チェック
14 回 6/4	最終レポートの提出、プレゼンテーション３	

※8-12 回までは、同一のテーマについてのレポートを、周りの人に添削してもらい、改善点を指摘してもらうことで、伸ばしていく（パラグラフのつなぎ、論証の補強など）作業を続けた。

※周りにチェックしてもらっても、あまり良いフィードバックが得られなかった場合は、教員にメールの添付ファイルで送り、赤ペンを入れて返却した。毎回授業で、2-3 人ほど、希望者が出て対応した。

※最終レポートも同様に、赤ペンを入れて返却した。

※プレゼンテーションは、40 人弱のクラスでは全員行うことは不可能だったので、希望者を募り、授業で 3-4 名の学生にやってもらった。聞いている学生にはコメントシートを書いてもらい、発表した学生にフィードバックを行った。

４．使ったテキスト

使ったテキストは、以下の 3 つである。

・『論理的に考える』
・『論理的に読む』
・『論理的に書く』・・『論理的文章表現』に基づく、青木作成のプリント

『論理的に考える』は、アカデミックスキル１の前身の授業である「文章表現法」の頃からの蓄積であったこともあり、初年次を念頭に置いたレベル設定、短い問題演習を豊富にした点など、この授業に合わせ使いやすさを重視したテキストである。『論理的に読む』では、『考える』で習った論証（主張＋根拠）の応用編として、長めの文章の要約・要旨を作成する練習問題を行った。最後の『論理的に書く』だが、これはテキスト『論理的文章表現』から、パラグラフライティングの観点から必須と思えるところを抜き出しまとめたプリントである。特に、『論理的文章表現』の中に現れるフック、サンドイッチ構造、Thesis Statement、コンクルージョンといった項目は、本格的な論文（学術誌に投稿される 10000 文字オーバーの長さのもの）でないと実現させるのは困難であったので、『論理的に書く』においては割愛した。

５．事後評価および反省点

最終レポートにおいて、①「論証」、②「長めの文章」「パラグラフライティング」という授業目標が達成できているかを確認するためのルーブリックを作成し、70 点満点による評価を行った。以下の簡単なルーブリックを学生に事前に提示し、満点のレポートを完成させるための基準を示した。第 12 回・第 13 回授業では、完成した最終レポートをグループワークで相互チェックしてもらい、各項目において満点に近づけるよう互いにアドバイスをしてもらった。

■最終レポートの評価（✔で合計 70 点）

字数は守られているか

1600 字未満　・・0 点　　1600～3200 字　・・10 点　　✔3200 字以上　・・15 点

パラグラフライティングを守れているか

✔TS(トピックセンテンス)を拾い読みすることで、文章の大意がつかめるか？　・・10 点
✔TS に続く文はすべて SS(サポーティングセンテンス)としての役割を担っているか？　・・5 点
✔１つのパラグラフに TS が複数入っていないか？（１パラグラフ１メッセージの鉄則）　・・5 点
✔イントロダクション、コンクルージョンがしっかり組み込まれているか？　・・5 点

論証はきちんと行われているか

✔主張は明確か？　・・5 点
✔根拠は確実なものか？　根拠から主張までの橋渡し（ワラント）は自然か？　・・10 点

✔直列型、並列型といった論証構成がしっかり意識されているか？　・・5 点

引用は行えているか

✔最低 3 つの引用が行えているか？　・・5 点

✔引用の書誌情報はしっかり揃っているか？　・・5 点

最終レポートの結果は、以下の通りである。合計 33 人のレポートの素点を表示している（一番上が A 君、二番目が B さん、三番目が C 君、・・・といった具合である）。灰色でハイライトされているのは、一番下にある、各項目の平均点を大幅に下回っている箇所である。

字数	拾い読み	SS	1つのTS	イントロ、コンクル	論証	3つ引用	書誌情報
/15	/10	/5	/5	/5	/20	/5	/5
15	5	5	5	5	20	5	5
10	10	5	5	5	18	5	5
15	7	5	5	5	18	5	5
15	10	5	5	5	20	5	5
15	0	5	5	5	7	5	5
15	10	5	5	5	15	5	5
15	8	5	5	5	15	5	5
15	10	5	3	5	20	5	5
15	10	5	5	5	15	5	5
15	8	5	5	5	18	5	5
15	10	5	5	5	18	5	5
15	10	5	5	5	15	5	5
15	10	5	5	5	10	5	5
15	8	3	5	5	20	5	0
15	5	5	5	0	15	5	5
15	8	5	5	5	20	5	5
15	8	5	5	5	20	5	5
15	8	5	5	5	15	5	5
15	8	5	5	5	20	5	5
15	8	5	5	0	15	5	5
15	10	5	5	5	15	5	5
15	10	2	2	5	20	5	5
15	8	5	5	5	20	5	5
15	10	5	2	5	17	5	5
15	10	5	5	2	15	5	5

15	10	2	2	5	10	5	5
15	8	5	5	5	18	5	5
15	0	0	0	0	15	5	0
15	10	5	5	5	15	5	5
15	5	5	5	5	20	5	5
15	5	0	5	5	15	5	5
15	10	5	5	5	10	5	5
14.84375	8.03125	4.44	4.5	4.4375	16.375	5	4.6875

結果として、一番下にある平均点が示しているように、概ね各項目において学生は満点に近いパフォーマンスを示しており、授業目的の達成率という観点からみれば、授業は成功だったと評価できるだろう。ただし、幾つかの反省点もある。

・反省点 1. TS の拾い読みが可能なパラグラフライティングになっているか

パラグラフライティングの最も便利な点は、各パラグラフの中身を詳細に検討せずとも、パラグラフ冒頭の TS(トピックセンテンス)を拾い読みするだけで、論文全体の論旨が正確につかめることにある。これは、書き手によって「論文全体の見通し」を得られていないと、達成することは難しい。逆に言うと、TS の拾い読みで論旨がつかめる論文というのは、著者が、論文全体の論理構成についてのしっかりとした見通しが持てているということの証左なのである。この TS 拾い読みの項目が、上の表を見ると一番達成率悪いことが分かる（8 割強)。この項目において芳しくない学生がけっこういるのが問題である。今後の授業においては、論文全体の構成について、意識して書くようにもっと指導が必要であろう。

・反省点 2. 論文の形式についてのテンプレートを増やす

今回(2018 年度)の私のアカデミックスキル 1 のライティング指導においては、「直列型」のテンプレートに従って書くことを奨励した。特に、【問題→原因分析→提案→解決】という型を紹介し、模範文章例を 2 つほど提示した。その結果、ほとんどの学生がこのテンプレートを真似た文章を書くことになった。もちろん、どんな学習であれ“模倣”から始まるので、これ自体は悪いことではない。しかし、最終レポートで、学生が 3200 字オーバーの長さのものを書くことができたのは、かなりテンプレートに従って書いていた部分も大きかった。今後の反省点としては、【問題→原因分析→提案→解決】以外のテンプレート、他の直列型以および並列型のテンプレートも紹介し、書く訓練を行わせていきたい。そうすることで、様々なライティング課題にも対応できる応用力が身に付けられることが期待できる。さらには、テンプレートのストックを増やし相対化させ、型のストックを臨機応変に使い分けてもらうような指導も、今後は行っていきたい。